

**【巻頭言】 教育局次長挨拶 雷坂浩之「皆様への感謝と共に、もうしばらく頑張りましょう!」**

- 2 ●コロナ禍で工夫したWWL事業 ——— 濱本悟志
- 3 ●学校に泊まろう!～校内宿泊学習～ ——— 高井彩子
- 3 ●3年生の清里合宿 ——— 白坂洋一
- 4 ●附属高校の総合的な探究の時間の取り組み ——— 速水高志
- 4 ●施設併設学級、本校小学部、本校中高部(3ステージ)に分かれての音楽鑑賞会 ——— 河野文子
- 5 ●Onlineでのオープンキャンパス開催 ——— 徳竹忠司
- 5 ●駒場の探求－教科の枠にとらわれない授業－ ——— 西山明浩
- 6 ●専攻科オープンキャンパスの取り組み ——— 柴田健一
- 6 ●関東地区薦教育研修会開催～ポストコロナ時代に向けて～ ——— 鎌田ルリ子
- 6 ●一年生 富浦生活 ——— 川崎 修
- 7 ●芸術鑑賞会～バントマイムから表現を学んで～ ——— 杉田葉子
- 7 ●国内フィールドワーク ——— 中井 誠
- 8 ●共生社会を目指す芸術・文化交流の集い

「Diversity of Picture Books」  
(つくばっ子の会 高校1年次共同制作)



# 皆様への感謝と共に、もうしばらく頑張りましょう！

附属学校教育局 次長 雷坂浩之



HIROYUKI  
RAISAKA

コロナとの闘いが始まって、早くも1年半となりました。この間、何度か感染の拡大が繰り返され、その都度緊急事態宣言が出されたり、まん延防止等重点措置が講じられてきました。附属学校群各校においても、安心・安全な教育活動の維持を目指した感染防止策の徹底や行事・校外活動などの見直しを繰り返し、登校できない子どもたちへの学習権の補償としてのオンライン授業の充実なども進み、社会全体が不安や不満に満ちあふれた雰囲気の中、コロナとのお付き合いにも大分慣れてきたように感じています。

この間、附属学校群各校の子どもたちには、時には家庭学習や分散登校・時差登校をお願いしたり、友達同士での会話の自粛をお願いしたり、宿泊を伴う校外活動においても期間の短縮や集団の実施規模の縮小を強いたりして、とても辛い思いをさせてしまいました。日々感染拡大を可能な限り食い止めようとする学校の考え方をご理解とご協力をいただき、子どもたちや保護者の皆様には、本当に感謝の念で一杯です。

また、コロナワクチンに関しては、東京医科歯科大学と東京大学のご協力により、子どもたちや教職員が居住している地域よりも早くに接種を終えることが出来ました。こうしたワクチン接種で、子どもたちや教職員が相互に感染しない・させないという安心感を生み出しました。接種にご支援をいただいた両大学の皆様にも心からお礼申し上げます。

コロナとのお付き合いはまだまだ続くと思われますが、引き続き力を合わせて乗り越えていきましょう。



## コロナ禍で工夫したWWL事業

附属学校教育局特任教育長補佐  
濱本悟志

本事業では、拠点校の附属坂戸高等学校と5附属の高校生が「国際フィールドワークを通じて持続可能な国際社会を創る人材育成システムの構築」に取組んでいます。最終年度の本年度は、COVID-19感染拡大の中、以下の5つのプロジェクトを計画しました。

### ①国内外フィールドワークによる体系的探究型学習の開発

中止となったアセアン校外学習の代替措置として、7/14～17に附属坂戸高等学校の2年生が静岡県掛川市、山形県笛吹市、長野県飯田市、長崎県西海市を訪問し、相互理解と問題解決に必要な考え方について理解を深めました。

### ②高大連携による高度な学習を可能にする環境の構築と実践

筑波大学の地球規模課題学位プログラムや生物資源学類と連携し、11～12月にSDGsをテーマに持続可能な社会の実現を目指した分科会を計画しています。

### ③連携校との合同海外フィールドワーク等による成果の検証

合同派遣を中止とし、国際会議や全国フォーラムでの各校

の発表に切り替えることにしました。

### ④オリ・パラ教育とインクルーシブ教育の推進

延期となった「国際ピエール・ド・ケーベルタン・ユースフォーラム」の日本代表者によるオンライン研修会を6/8に実施し、次年度に向かって12/25～26に「ケーベルタン・嘉納・ユースフォーラム（兼日本代表選考会）」を計画しています。また、附属視覚特別支援学校の高校生5名が、「トビタテ！留学JAPAN」による感染収束後の派遣を待っています。

### ⑤高校生SDGs国際会議の開催と発信

11/20に附属坂戸高校を配信元として、WWL事業最大企画の「高校生国際ESDシンポジウム」を計画しています。



長崎県西海市グループの集合写真



みんなで花火もしました

## 学校に泊まろう! ～校内宿泊学習～

附属久里浜特別支援学校 小学部  
**高井彩子**

7月に小学部3年生の宿泊学習を行いました。本校小学部では、例年1年生から4年生まで、校内での宿泊学習を行っていますが、昨年度は感染症拡大防止の観点から中止となつたため、2年ぶりの宿泊学習となりました。

1日目は路線バスに乗ったり、買物やファミリーレストランで食事をしたりして、公共交通機関や公共の施設の利用の仕方を学びました。夕食は買物で購入した材料を使って、カレーライスを作りました。子供たちは、包丁を丁寧に動かして野菜を切ったり、カレールーをそっと鍋の中に入れたりして、上手に作ることができました。自分たちで作った、熱々のカレーライスをおいしそうに頬張る子供たちの表情が、とてもかわいらしかったです。

また、季節を味わうためにすいか割りやアイスクリーム作り、花火なども行いました。すいか割りは、すいかが割れた瞬間、みんなびっくり! 仲良く分け合って食べました。

家族以外の人といつもとは違う場所に泊まることは、子供たちにとって楽しみにしていた反面、緊張したり不安に思ったりすることもあったと思います。しかし、2日の下校時、迎えに来た保護者と嬉しそうに、そして誇らしげに帰っていく児童の姿を見て、「楽しかった!」、「がんばった!」、「できた!」と感じられる、良い宿泊学習になつたのではないかと思いました。

今後も、感染症対策を徹底した上で、幼児児童にとって、楽しく学びのある学習や活動を行っていきたいです。

すいか割りに挑戦!

カレーライス、おいしいね



## 3年生の清里合宿

附属小学校 教諭 **白坂洋一**

「それでは、行ってきます」

私の発したその声がいさか緊張していることに気づきました。感謝、その一方で抱いていた不安が緊張として、声に現れたのだと思います。

6月、3年生は1泊2日の清里合宿を実施しました。コロナ禍ということもあり、十分な感染対策が私たちに求められました。宿泊を伴うため、実施に当たっては、保護者にも納得し、同意していただく必要があります。しかし、私たちは、汗馬の労もいとわないと思っていました。

自発的に部会を立ち上げ、多くの時間をかけて検討をした上で、感染対策を十分に踏まえた計画を立案していました。また、計画に基づいて実地踏査も行いました。どの場面がポイントになるか、そのためにどのような対策が必要かをシミュレーションしていました。

実際に赴くことで、当然、多くの気づきがありました。また、新たな課題も生じました。課題の一つひとつを担任団で共有しながら、「知恵」を出し合い、計画をより具体的なものに、そして誰が見ても納得のいくものに仕上げていきました。一方で、検討の結果、どうしてもあきらめなければならない活動もありました。

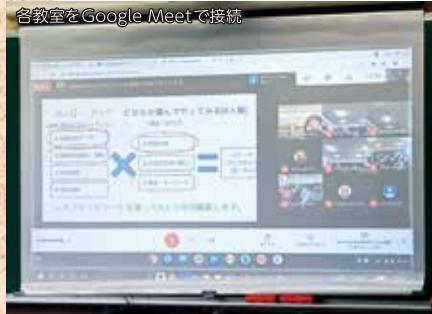
しかし、コロナ禍において実施することができたのは、附属小職員が一丸となっての協力、保護者の理解、そして学校教育局の支えがあったからこそと考えています。

「みんなといっしょの登山」「きずなを深めた清里合宿」合宿を終えた子どもたちが、活動を振り返ってまとめた新聞の見出しの一部です。清里合宿を通して得た「今、ここ」でしか味わうことのできない体験が、一人ひとりの思いとして表現されています。



# 附属高校の総合的な探究の時間の取り組み

各教室をGoogle Meetで接続



附属高等学校 教諭  
**速水高志**

附属高校では、SGH指定校の際に取り組んでいた総合的な学習の時間「SGHスタディ」の後継として、総合的な探究の時間「筑波スタディ」を実施しています。1学年で研究スキル向上のための基礎講座、2学年で研究活動というベースはそのままで、各学年での取り組みをプラスアップさせています。

1学年では、単位数を1単位から2単位に増やし、研究活動に必要な知識・技術を学ぶ基礎講座を前期にまとめ実施しました。従来では一人の教員が1つの教室でしか講義ができませんでしたが、コロナ禍で培った配信技術・設備をフル活用して、学年全体への一斉授業をHRで展開しています。講義担当の教員がGoogle Meetで講義の様子を各教室に同時配信し、生徒は各自のChromebookを利用してJamboardやスプレッドシートをグループで共同編集しながら話し合い、話し合いの結果をGoogle Meetで発表して他クラスと共有したりと、実習を通して学んでいく附属高校のいつもの授業風景を各教室をオンラインで結びながら実施できています。後期では2学年での本研究のための予備研究を行います。

2学年では、昨年度途中から導入した本校卒業生によるチューター制度を継続しています。希望するグループが、実際に研究を行っている大学3年生以降の卒業生から、研究内容や発表についてのアドバイスを直接またはZoomやGoogle Meetでもらうことによって、より良い研究活動が進められています。



1学年HR教室での基礎講座

# 施設併設学級、本校小学部、本校中高部(3ステージ)に分かれての音楽鑑賞会

附属桐が丘特別支援学校 教諭  
**河野文子**



6月30日(水)、施設併設学級体育館及び本校体育館において、音楽鑑賞会が開催されました。昨年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、残念ながら中止となりました。

今年度の音楽鑑賞会は、感染防止対策を十分に行なった上で、例年本校体育館で施設併設学級及び本校児童生徒が集まって行っていたものを施設併設学級(施設併設学級体育館)がステージ1、本校小学部(本校体育館)がステージ2、本校中学部・高等部(本校体育館)がステージ3と、3回のステージに分けて行いました。また、例年行っていた保護者の参加も今年度は中止となりました。体育館の窓やドアを開けるなどの換気や消毒を徹底するなど可能な限りのコロナ対策を行なう音楽鑑賞会となりました。

今回は、津軽三味線演奏家の清水まなみさんをお招きました。演奏曲は、1吹雪(かぜ)の花(はな)(津軽(つがる)民謡(みんよう)「津軽(つがる)よされ節(ぶし)」のアレンジ曲(きょく))、2りんご節(ぶし)(津軽(つがる)民謡(みんよう))、3亜路(あじ)彩(さい)～AJISAI～(オリジナル曲(きょく))、4ふるさと(童謡(どうよう))、5津軽(つがる)じょんから節(ぶし)(津軽(つがる)民謡(みんよう))の5曲でした。日頃の成果を発表することができました。基礎疾患を持つ児童生徒が在籍する当校としては、開催についての感染が心配され、オンラインによる実施も検討されました。しかし、十分な配慮を行うことにより、日本の伝統的な楽器である三味線を使ってのアートな世界を拓く素晴らしい音楽家の生演奏による音楽鑑賞会を開催することができました。3回のステージ演奏を快く引き受けいただき、各々のステージで常に熱い三味線の音色を聴かせてくださいました清水まなみさんに心から謝意を表します。



# Onlineでのオープンキャンパス開催

理療科教員養成施設  
徳竹忠司

2021年度 第1回オープンキャンパスは6月27日(日)に開催されました。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点に従い、3密を避けるためにZoomを利用したOnlineでの実施と致しました。理療科教員養成施設には、教員養成コースと鍼灸の臨床研修コースがあるため、午前中を教員養成コースの説明とし、午後を臨床研修コースの説明と致しました。

参加希望はポスターに記載しましたアカウントへ申し込む形式をとり、最終的には全体で35名の応募がありました。施設側としましては、教員養成コースと臨床研修コースは性質が異なるものであるため、参加希望者も午前の部・午後の部と分かれることを想定しておりましたが、35名のほとんどが両コースの説明に参加するという結果になりました。例年の参加者と様子が異なった点は、Onlineでの実施としたことで、参加者の住所地が全国区となったことです。これまででは教員養成コースの説明会には、遠方からの参加者も希にいらっしゃいましたが、臨床研修コースは、都内の鍼灸学校に在籍している方々でした。今回の参加者は九州から北海道までと広範囲となりました。午前と午後

の共通は養成施設の歴史などを含む概要で、教員養成コースのポイントはキャンパスライフ、取得免許などについての解説で、臨床研修コースのポイントは、筑波大式鍼通電療法が習得できることで、免許取得後の研修としては、内容の濃いものであることです。例年行っております施設見学は、事前にビデオを作成し参加希望者に画像配信をオープンキャンパスに先立ち提供をしました。

## 筑波大学 理療科教員養成施設 Open Campus



開催日：2021年6月27日(日)  
教員養成課程（教員志望） 10時～12時  
臨床専攻生（研究・臨床研修志望） 13時～15時  
理療修生（臨床研修志望） 13時～15時  
場所：Zoom開催 ※電子メールでの事前申し込みが必要です  
内容：模擬講義、理療科ツアー、先輩に聞いてみよう！など  
お問い合わせ  
教員養成課程：riryoukanyuushi@un.tsukuba.ac.jp  
専攻生・研修生：riryoukensyuusei@un.tsukuba.ac.jp  
TEL: 03-3942-6890  
住所：〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 筑波大学東京キャンパス文京校舎  
東京メトロ丸の内線茗荷谷駅下車徒歩3分  
筑波大学理療科教員養成施設は当校にて複数（はり・きゅう・あんらん）を複数する方が同時にいるのです

## 駒場の探求－教科の枠にとらわれない授業－

附属駒場中・高等学校 教諭  
西山明浩



中学国語の教科書には「口語文法」が掲載されている。中学受験においても出題されることがあるため、本校では既に理解している生徒も多いようである。高校古典の教科書には「文語文法」が

掲載されているが、余程の古文好きでない限り、「文語文法」を学習するのは本校に入学してからのことであろう。私も高校一年の夏に「用言の活用表」や「助動詞の活用表」を丸暗記したのを記憶している。私たちは「国語」の科目において、二つの文法を体系的に学習している。

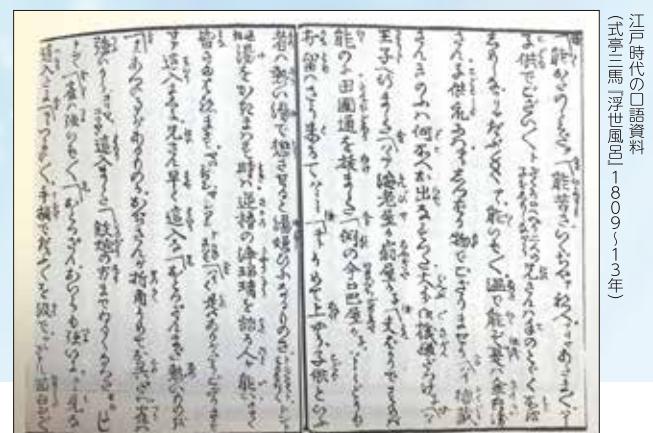
古典の授業で扱う文章は上代から近世まで、およそ千年間の幅がある。本来、言葉とは世代間でも差が生じるものであり、千年もの幅のある文章を一つの「文法」に基づいて読むという行為は奇妙なことでもある。

「文語文法」とは、平安時代の京都方言を「規範」とするものである。つまり、古典の教科書に掲載される文章は、平安時代の話し言葉を真似て書いたものなのである。平安

時代の文法については、早くも院政鎌倉時代に崩壊が始まったと言われており、室町時代や江戸時代の日本語は現在の日本語に非常に近い形とされている。

以上の流れを踏まえるにしろ、最終的には「文語文法」を「暗記する」ことは必要なのであろう。本校においても呪文のように覚えている生徒も多いのではないか。

しかし、本来言葉とは生きているものであり、「文語文法」は、その変遷の一断面に過ぎない。下手な説明では混乱の元となり得るが、これらのことと意識した説明を心掛けたい。より「良い」形がどのようなものか、一つのテーマである。



# 専攻科オープンキャンパスの取り組み

附属視覚特別支援学校 専攻科鍼灸手技療法科 柴田健一

視覚特別支援学校専攻科は、鍼灸手技療法科・理学療法科・音楽科の3科から成る、職業自立のための専門教育を担う学科です。少子化や選択できる職種の広がり等により、入学希望者が減少していたことから、専攻科全体としてオープンキャンパスを実施することとなり、今年で3年目を迎えました。毎年2回ずつ実施し、これまでのべ87名の参加を得ました。来校できない遠方の人からは、Zoomによる参加ができ、学校の様子がよくわかったと感想をいただきました。また、丁寧な説明に努めたことで、入学につながった参加者もいて、一定の成果をあげることができました。

各科の授業の様子を動画で紹介したものの中から、その一部を写真にしました。



鍼灸手技療法で刺鍼の様子の紹介



理学療法科で平行棒歩行の紹介

## 関東地区聾教育研修会開催 ～ポストコロナ時代に向けて～

6月17日・18日、関東地区聾教育研修会をオンラインにて開催しました。本研修は、基礎・基本を伝える講義と研究授業・授業研究会で内容を構成しています。子供と教師のやりとりを直接見ることができる研究授業、その後の授業研究会は本研修の真骨頂です。しかし、参集型研修会が困難な今年度は、事前にオンラインで授業を見てもらい、当日、オンデマンドで授業解説を配信しました。

オンラインによる授業視聴は、一体感や臨場感こそないものの子供と教師のやりとりを画面越しに冷静に見ることができます。時間をかけて省察した授業解説は、授業者自身にとって多くの学びにつながりました。

また、手話通訳、字幕挿入など情報補償のための取組もポストコロナ時代にむけて新たな一歩となりました。

附属聴覚特別支援学校 主幹教諭 鎌田ルリ子



授業解説の撮影風景

令和3年度関東地区聾教育研究会  
聾教育実践研修会 講義！

聴覚障害児の教育について

令和3年6月17日  
筑波大学附属聴覚特別支援学校

本研修会は、聴覚障害児1、2年目の育ち  
対象とした初任者研修会です

手話通訳、字幕を付けたスライド画面

## 一年生 富浦生活 1年担任団 富浦担当 川崎 修

一気に暑さが厳しくなった7月15・16・17日、「<sup>しんか</sup>真化」をスローガンに1年生は三期に分かれて日帰り富浦生活を実施しました。

宿泊や日本泳法の演習を断念せざるを得ませんでしたが、学級委員で構成された富浦委員を中心に、生徒たちは立ち止まることなく新たな富浦生活の実現を目指して模索し続けました。事前学習では、富浦生活の歴史学習や、桐游倶楽部の師範や先輩の講話等により、附属で受け継がれてきた富浦生活の意義を真剣に考えました。

当日は3日間とも天候に恵まれ、大房岬でグループでの写真撮影プロジェクトに取り組んだり、富浦寮や附属の浜でレクリエーションを楽しんだりしました。なにより“富浦”で学級の枠を超えて学年の仲間と充実した時間を過ごすことができたことで、一年生は附属生としてまた一歩前進することができました。

集合写真



富浦寮



パントマイミストの江ノ上さん



## 芸術鑑賞会～パントマイムから表現を学んで～

附属大塚特別支援学校 中学部主事 杉田葉子

今年度の芸術鑑賞会は、パントマイミストの江ノ上陽一氏をお招きし、パントマイムのパフォーマンスを観たり、ワークショップでパントマイムの身体の動かし方やコツを教えてもらったりしました。

事前学習としては、東京オリンピックの開会式で披露された『動くピクトグラム』の動画を観て、パントマイムのイメージを膨らませてから当日を迎えるました。

当日、江ノ上氏のパントマイムが始まり、しなやかな動きで次々とパフォーマンスが繰り広げられると、生徒達の視線が瞬く間にステージ上に集まり、椅子から身を乗り出したり、思わず立ち上がったりして、食い入るように見つめていました。

知的障害のある生徒達にとっては、目の前にはないものを想像して動くことは、とても難しいことですが、手の使い方や力の入れ具合(緊張と弛緩)によって、ないはずの壁が目の前にあるかのように見えてくる不思議な体験に、生徒達も思わず夢中になって江ノ上氏と同じ動きを真似て、

一人一人の表現方法で見えない壁を作り出すことができました。コミュニケーションの多くは、言葉によらないノンバーバル・コミュニケーション(表情や顔色、ジェスチャー、視線)が大きな役割を果たしていると言われますが、まさしくパントマイムによる表現で、生徒達の気持ちをつかみ、一緒に楽しみを共有することができた鑑賞会となりました。



パントマイム体験をする生徒たち



舞台上で「壁」のパフォーマンス



## 国内フィールドワーク

附属坂戸高等学校 教諭 中井 毅

附属坂戸高校では2年次国内フィールドワーク(校外学習)を7月14日より3泊4日(長崎コースは2泊3日)の日程で実施しました。当初は3月にシンガポール・タイ・インドネシアの3コースに分かれて実施する予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、急遽行き先や内容を変更し、このようななたちとなりました。

今回のフィールドワークは長野(南信州)、長崎(長崎市・西海市)、山梨(笛吹市)、静岡(掛川市)の4コースにわかれ、それぞれの地域で課題に取り組む人々のお話をうかがい、体験学習を行いました。長野コースでは産業振興の取り組みや草の根の国際交流、長崎コースでは平和学習や無人島を活かした地域活性化の取り組み、山梨コースでは地域資源を活かした学習旅行の計画立案、静岡コースではお茶の6次産業化の取り組みなど、それぞれ体験を通じて学びを深めました。

実施期間中、本校所在地や行程先では、まん延防止等

重点措置や緊急事態宣言は発令されませんでした。しかし、日々の健康調査や体温測定、防護服や手袋等の持参や宿泊施設での個室の確保など、感染対策を講じた上で実施をしました。通常の校外学習と比べて少々窮屈になりましたが、実施2週間後を含め一人の感染者も出さずにつきました。

本校の探究学習はまだまだ続きます。今回の学びが今後の活動にも大いに役立つものと期待しています。





## 共生社会を目指す芸術・文化交流の集い

令和3年  
12月12日  
日曜日  
13:00 ~ 15:30  
Zoom(ウェビナー)による  
オンライン配信

13:00	▼ 開会
13:03	
13:03	▼ 教育長挨拶 講師紹介
13:10	
13:10	▼ 第1部
14:10	
14:10	▼ 第2部
15:10	
15:10	▼ 質疑応答
15:25	
15:25	▼ 次長感想
15:30	
15:30	開会



1997年生まれ。東京都出身。  
筑波大学附属桐が丘支援学校中学部および高  
等部卒業。  
立教大学現代心理学部映像身体学科卒業、同大  
学院博士前期課程在学中。  
中学生の頃、自分に合った学習方法としてiPad  
を紹介され、そこで短編映像の制作をきっ  
かけに映像制作に興味を持つ。

大学では、哲学、写真、映画、身体論などを学び  
ながら、3年次より映像制作系のゼミに所属する。  
また、ボランティアサークル「パリアフリー映画  
上映会」実行委員を務め、上映会の企画・運営  
を行う。  
現在、しようがい者が創作をする過程で生ま  
れる、身体観やしようがい観の変化について  
研究している。

○映画紹介  
車椅子に乗った監督が、しようがい者の表現活動の可能性を探った  
ドキュメンタリー。映画制作を通じて様々な人と関わるなかで、  
多様な「違い」を見えてゆく。

第42回ひあフィルムフェスティバル PFF アワード 2020 グランプリ受賞  
第33回東京国際映画祭で上映

ポスター・デザイン

筑波大学附属聴覚特別支援学校  
高等部専攻科造形芸術科  
長谷川 雄飛

## ●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む) こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事來歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。



発行日……令和3(2021)年10月31日

発行者……附属学校教育局教育長 溝上智恵子

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌

広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・バルーン

印 刷……広研印刷 使用紙: UHimax [日本製紙]

